

超鳥戦隊ガйнаバード

その一員女鳥ヒナ  
またの名を「ガйнаピンク」

人類奴隷化計画を遂行する  
悪の組織「リツガー」と戦う  
ガйнаバード達



ガйнаピンクはリツガーの  
アジトに関する情報をキャッチ  
別任務に当たる他メンバーに  
代わり、独自に捜査を行っていた…

「が…ガハっ…」

「ガハハハ！愚かなガイナピンクよ！まさかこうも簡単に偽の情報に踊らされてくれるとなは！」

「私とした事が…」  
(もう…意識が…)

「ガイナピンク、今日は  
貴様が我らリックガーの奴隷  
となる記念すべき日だ！」



「こ…ここは…」

「我々のアジトへようこそ  
ガイナピンク！  
これから貴様奴隷としての  
調教を行う！」

「何ですって…！」



「ガイナピンクが我々の元に  
降ればリツガーにとって大きな  
躍進となるだろう」

「くっ…誰がアナタ達の手先なんか…」

「手先？何を勘違いしている？  
貴様になるのは奴隷は奴隷でも…」

「性奴隷になるのだ」





「オラオラ、どんな目に合うか  
理解しただろ？」

「や…やめなさい…!!  
そんな汚らわしいもの!!」





「...ハハハ...」  
「...」

「...」

又下又下...



(生臭い…なんて酷い臭い…  
マスク越しなのに臭ってくる…)

「……おっ……おっ……  
……おっ……おっ……」

ムワア

アアアア



「ほおら」「しても食らえ」  
「なびっー」

アッ

ズルル

「うおおお…おえええええ…！」

「ガハハハ！良い気味だ  
ガイナピンク！さあ調教を  
開始するぞ！」

アロオオオ……



「はあ…はあ…精液の臭いで  
気が遠くなりそう…」

「ただどこがアジトなら  
隙を見て脱出すればガイナードの  
みんなにアジトの位置の情報を  
伝える事ができる…」

「ハハハ何じゃアジト…」



「さあて早速ぶち込んでやるつもりか」

「なにちょ、ちょっとう…」



カッ

「や、やめなさい！そんな所…」

「綺麗な色してるな！  
ガハハハ！ブチ犯し甲斐が  
あるってもんだぜ！」



「たまらねえ…挿入するぜ」

「ま、待って！まだ準備が…」



「んんーんあああああああー！」

「どうだ人間が受け止めるには  
ちよっとデカすぎるだろ？」

「太すぎー！太すぎるから！  
こんなの…無理いいいいい！」

「叫ぶ度に締めりが良くなって  
どんどん奥に入れていくぜ！」



「はあああああああー！  
奥！奥まで入ってるうううー！」

「おお…すげえ絡みついてくる膣内だ…  
ガイナバードの力か？  
動くからガイナバードの力で耐えてみるよ」

「う…うぐうう…私は…  
ガイナバードは…負けない…！」



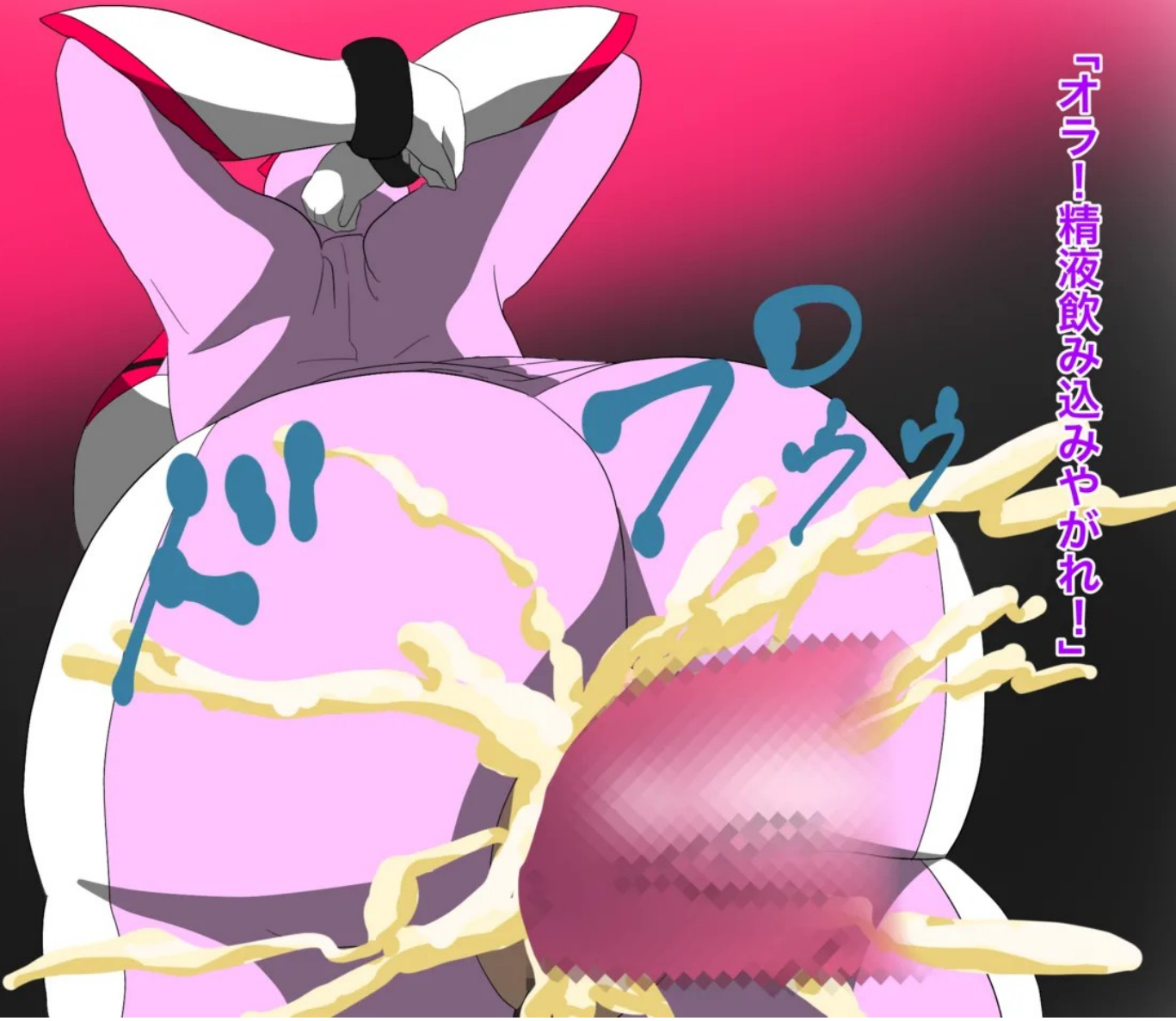
「おう♡おう♡お♡お♡お♡お♡お♡お♡  
お腹の中っ！えくれるうう♡」

「ガハハハ！速攻で情けねえ声  
出してんじゃねえか！  
だらしねえぜ、ガイナバードの  
名前が泣くぞ？」

「おおお♡お♡お♡お♡お♡お♡おん♡  
ガイナ…バード…は……♡」



「オラ！精液飲み込みやがれ！」



「負けなああああああ  
ああああああん♡」



「ああああ♡お腹が…熱いら…  
ドクドク出てるぅ……………♡」

「ああ〜射精止まらねえ…  
名器すぎんだろ…」

「ガイナピンク、絶対お前は  
性奴隷に墮としてやるぞ…」

「はあ…はあ…やれるものなら…  
やって…みなさい………」

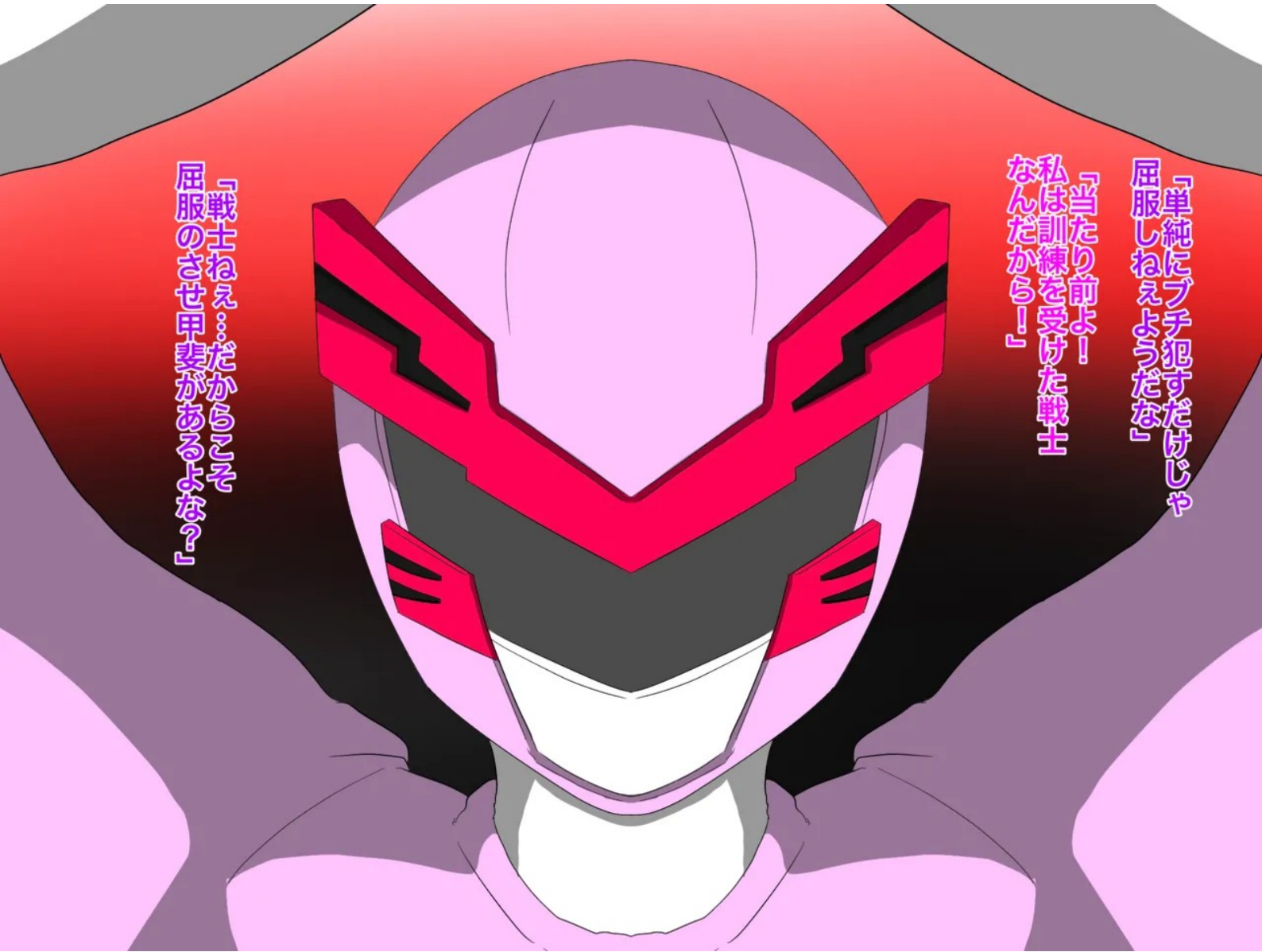
「流石ガイナバードの一員だ  
威勢がいいじゃねえか」



「単純にブチ犯すだけじゃ  
屈服しねえようだな」

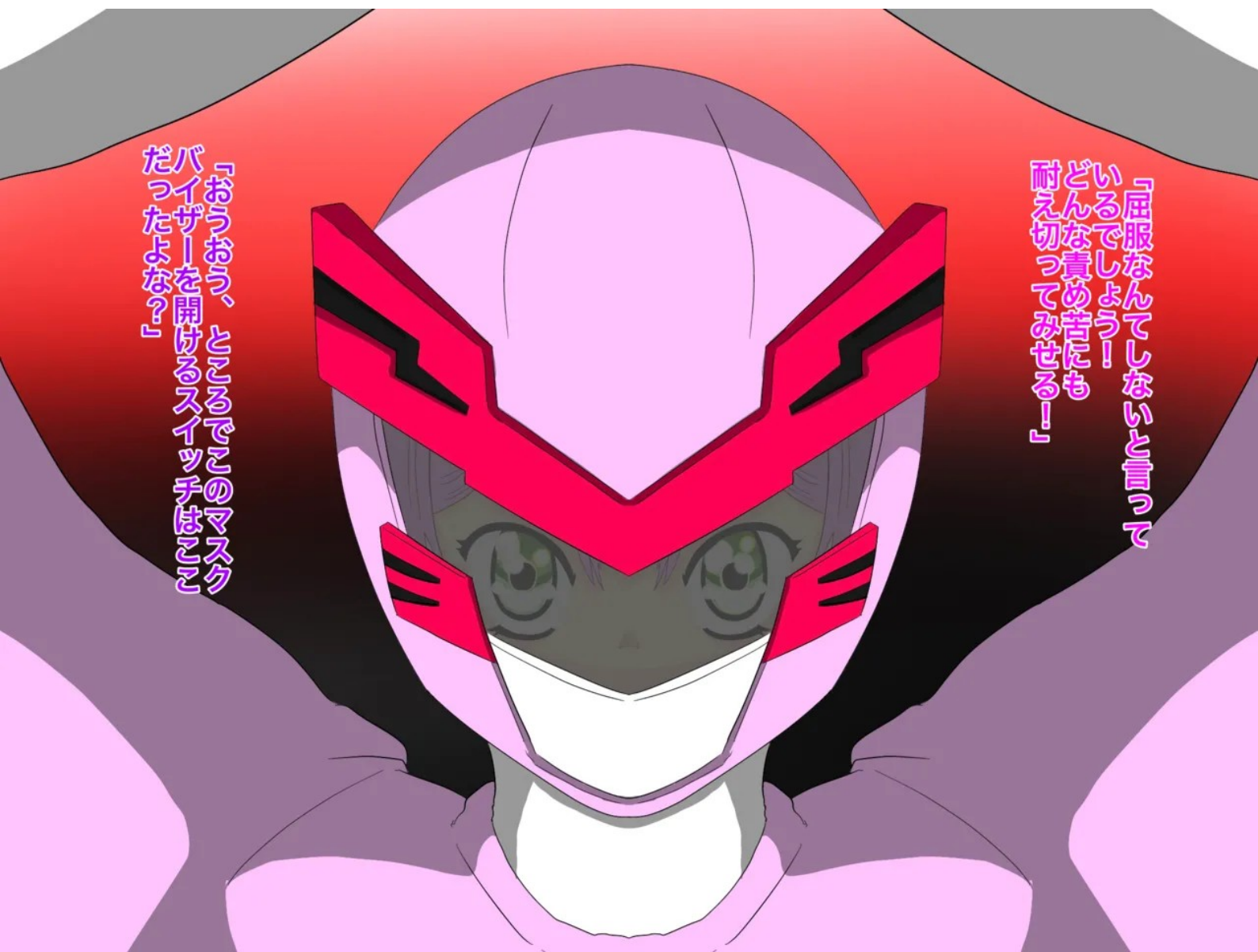
「当たり前よ！  
私は訓練を受けた戦士  
なんだから！」

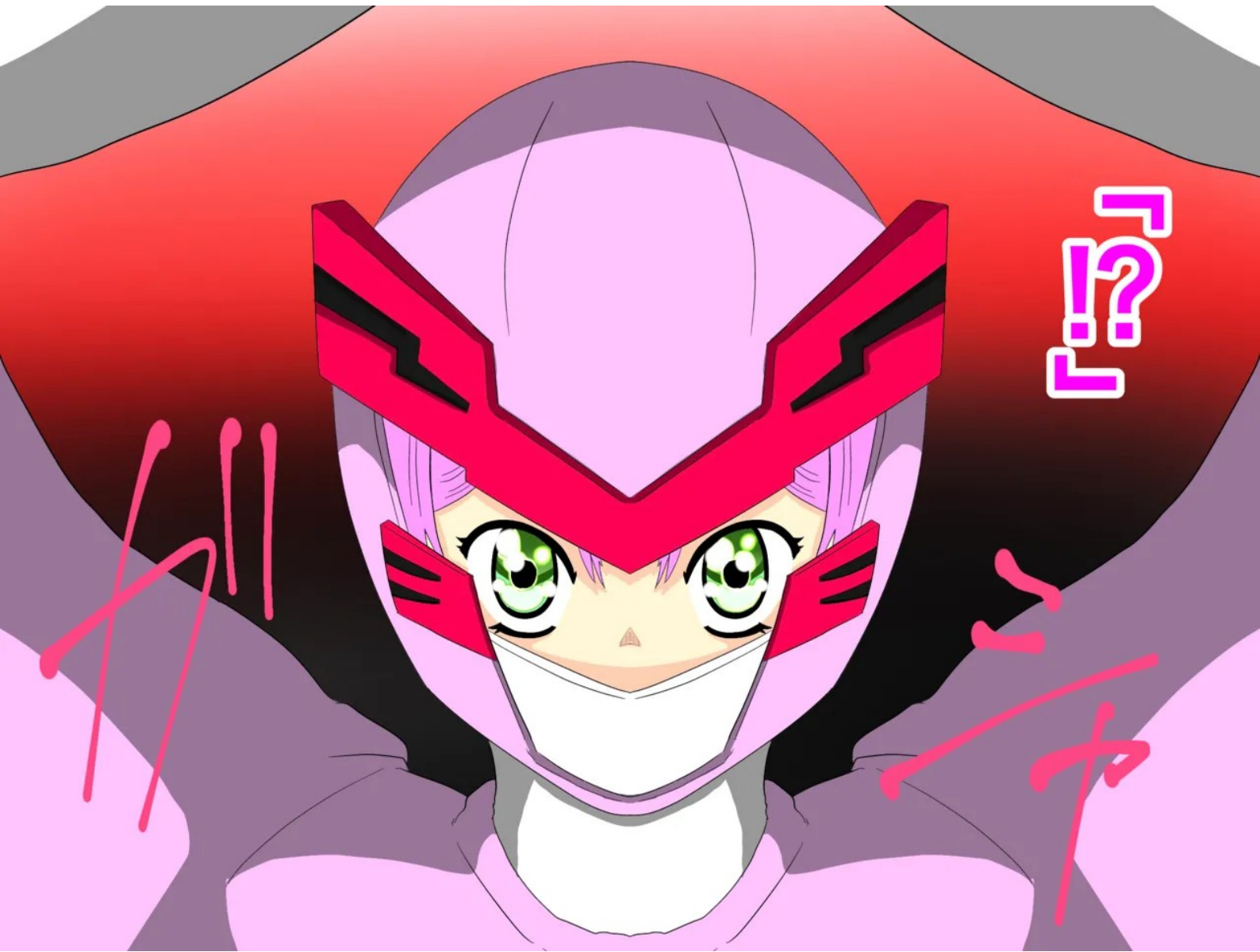
「戦士ねえ…だからこそ  
屈服のさせ甲斐があるよな？」



「屈服なんてしないと  
いって、どんでん返し  
もあるぞよ！」  
「どんな責め苦にも  
耐え切ってみせる！」

「おうおう、ところでこのマスク  
バイザーを開けるスイッチはここ  
だったよな？」





「?!」



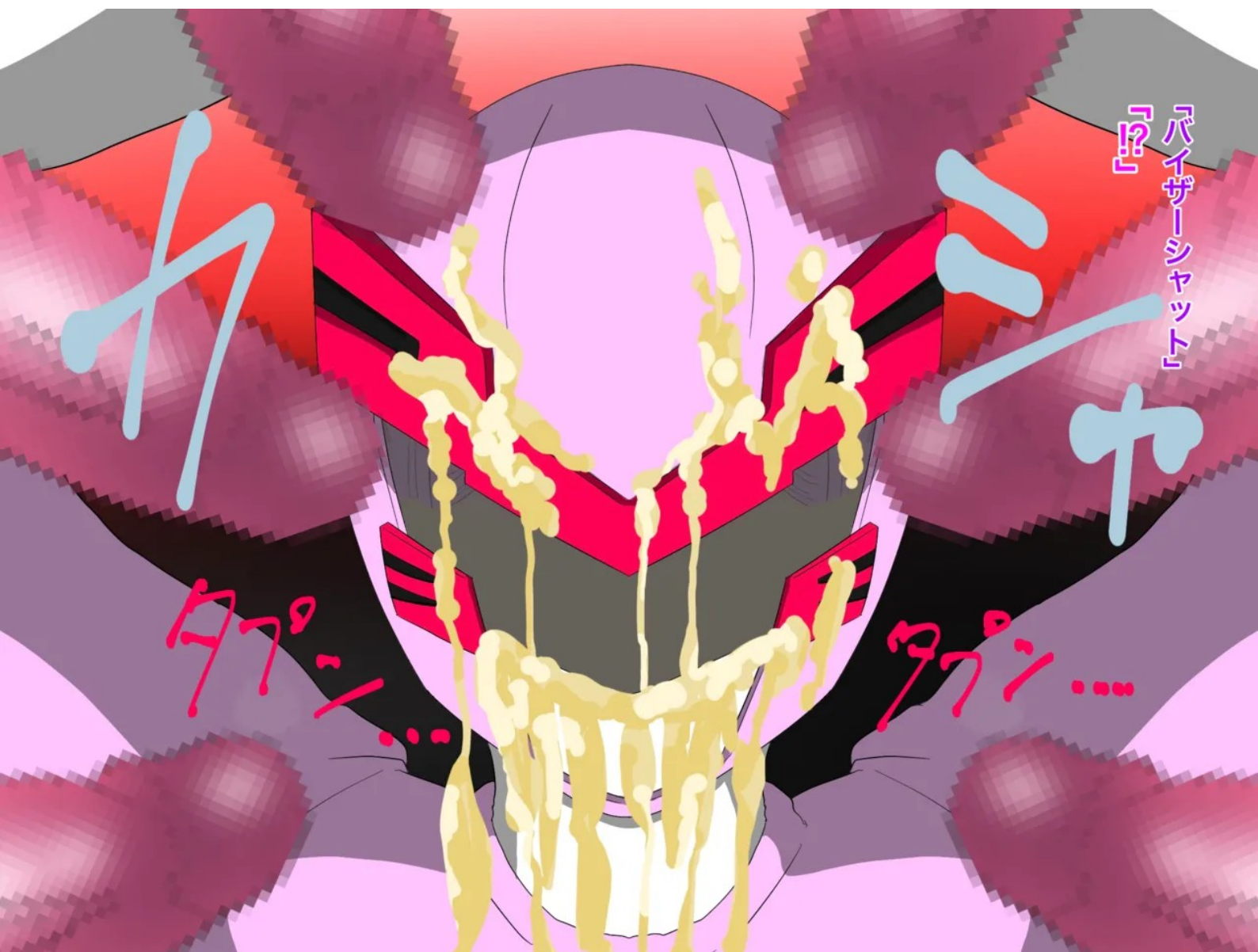
「さつき俺の精液の臭いで  
吐く程悶えてたよなあ？」

「おっっっっ...おっか...」



「いやあああああ！」





「!?」  
バイザーシャット

メ

ニホ

アッ...

アッ...

「んんんんんん！んんんんんん！！んんんんんん！！」

「ガハハハ！吐く程臭い俺達の  
精液！飲み干さないと窒息  
するぞ！ガイナピンク！」

「んん！んん！んん！んん！んん！  
んん！んん！んん！んん！んん！

んんん

んんん

んんん

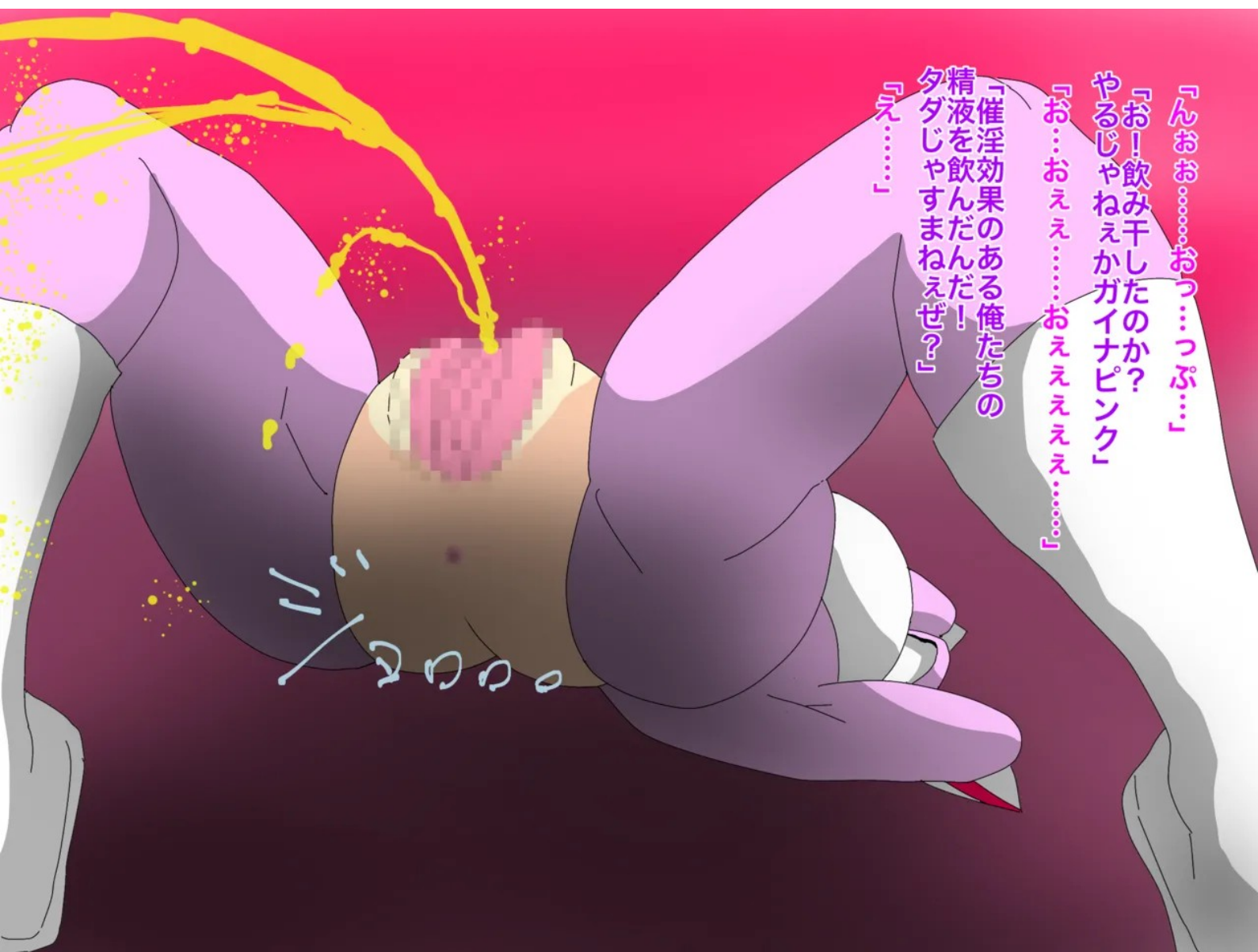
「んおお……おつ……つぶ……」

「お！飲み干したのか？  
やるじやねえかガイナピンク」

「お……おええ……おええええ……」

「催淫効果のある俺たちの  
精液を飲んだんだ！  
夕夕じやすまねえぜ？」

「え……」



「は……はへえ……♡  
お……おお……♡」

「早速効いてきたな？  
それじゃあ引き続きフチ犯して  
やるとするか！」

ゴッポポポポポポ……





「はあ…♡はあ…♡はあ…♡」

「覚悟はいいかガイナピンク  
普通の人間じゃ満足できねえ  
ようにしてやるからな」

「んほおおおおおおおおお  
おおおおおおお♡

「ガハハハ! どうだ!  
アナルに俺のデカマラは  
効くだろお?」





「んおっ♡んおっ♡  
ふと♡太っ♡ふと♡  
ふと♡のおお♡  
ふと♡の♡  
「もう殆どトんじまっでんじゃ  
ねえかあ?他愛もないぞ  
ガイナピンクよお!」

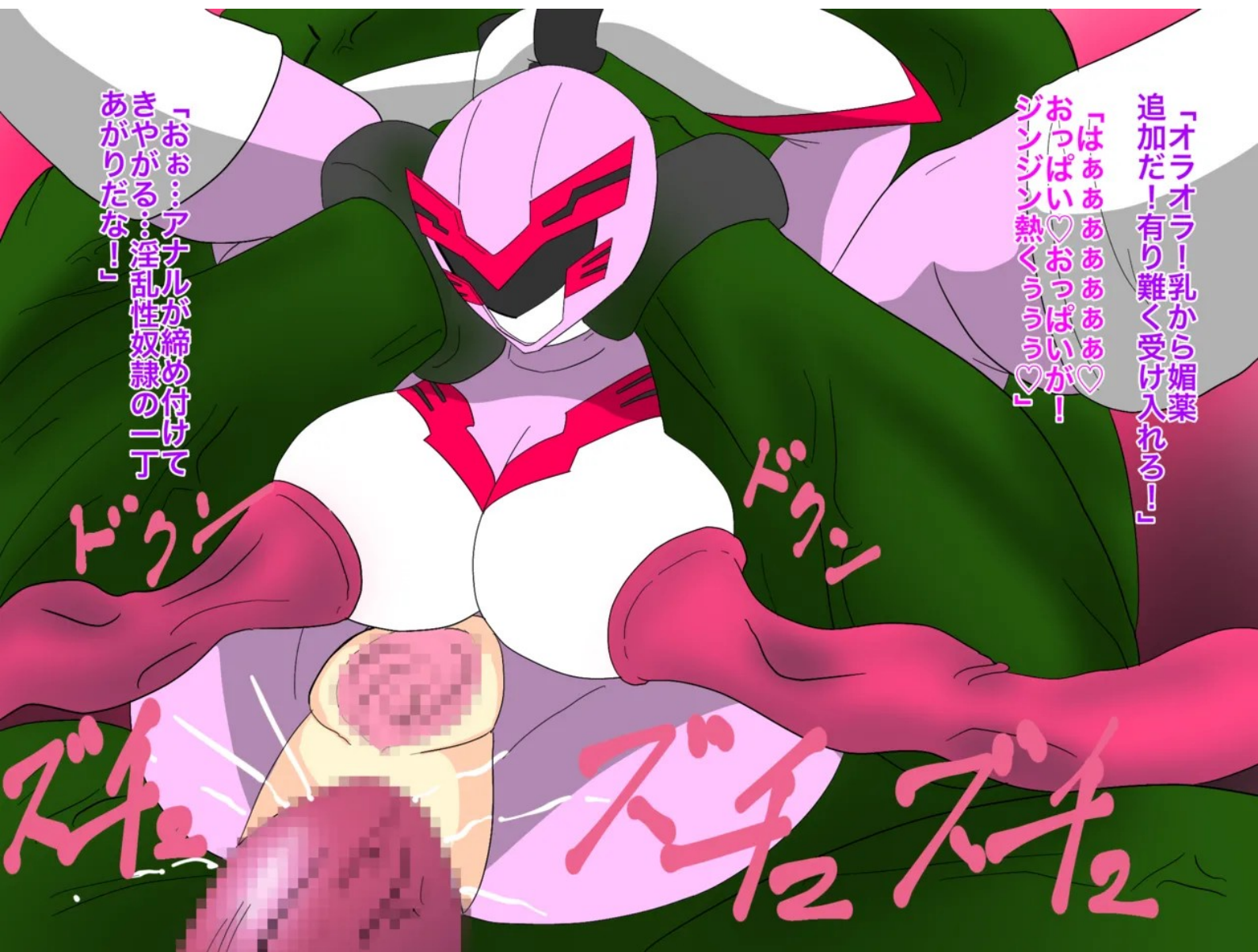
ズッ

ズッ  
ズッ  
ズッ

「オラオラ！乳から媚薬追加だ！有り難く受け入れる！」

「はあああああああ♡おっぱい♡おっぱいが♡ジンジン熱くううう♡」

「おお…アナルが締め付けてきやがる…淫乱性奴隷の二丁あがりだな！」



ドクン

ズンズン

ドクン

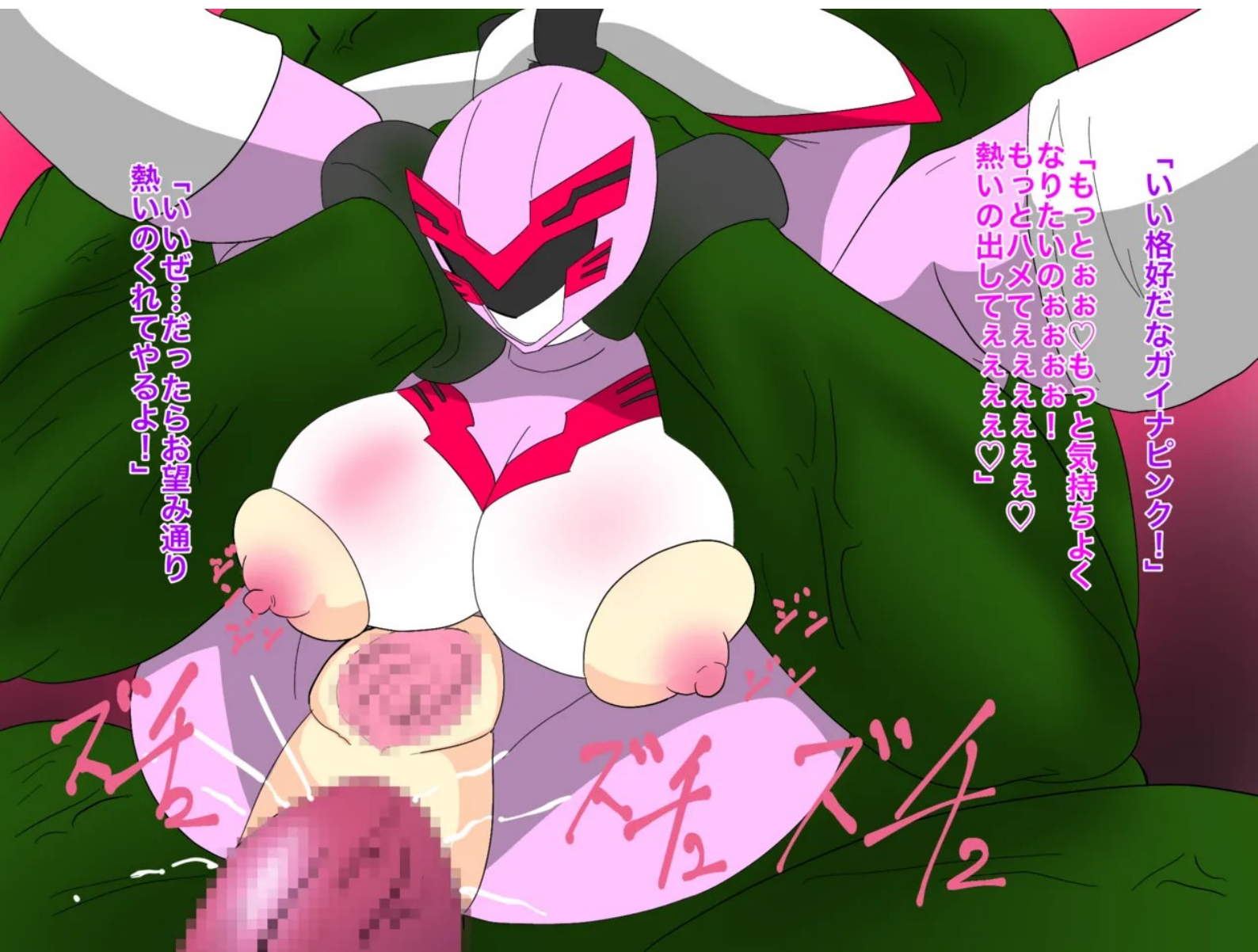
ズン

「いい格好だなガイナピンク！」

「もっととおお♡もつと気持ちよくなりたいのとおおおお！  
もっとハメてええええええええええ  
熱いの出してええええええ♡」

「いいいぜ…だったらお望み通り  
熱いのくれてやるよー！」

ズ  
ズ  
ズ  
ズ  
ズ  
ズ

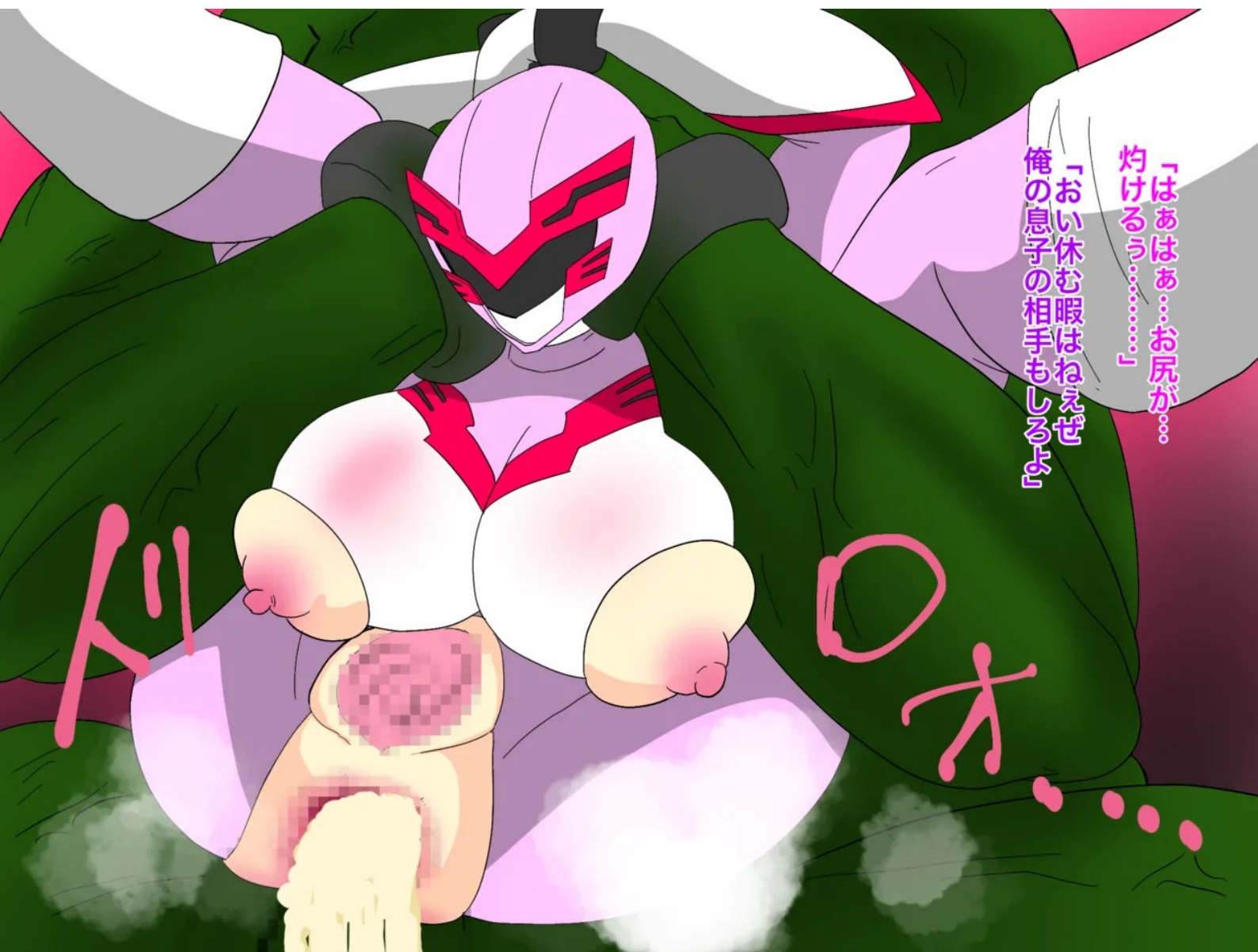




「んあああああ♡  
あ！熱い！熱い♡♡♡♡♡

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ



「はあはあ…お尻が…  
灼けるう………」

「おい休む暇はねえぜ  
俺の息子の相手もしるよ」



「あはーあはーあはあはあはー」  
「ガハハハ！我慢できねえか！  
お前のモンでガイナピンクを  
壊してしまえ！」



「あはーあはーあ  
おお………」

「んああああ……♡」

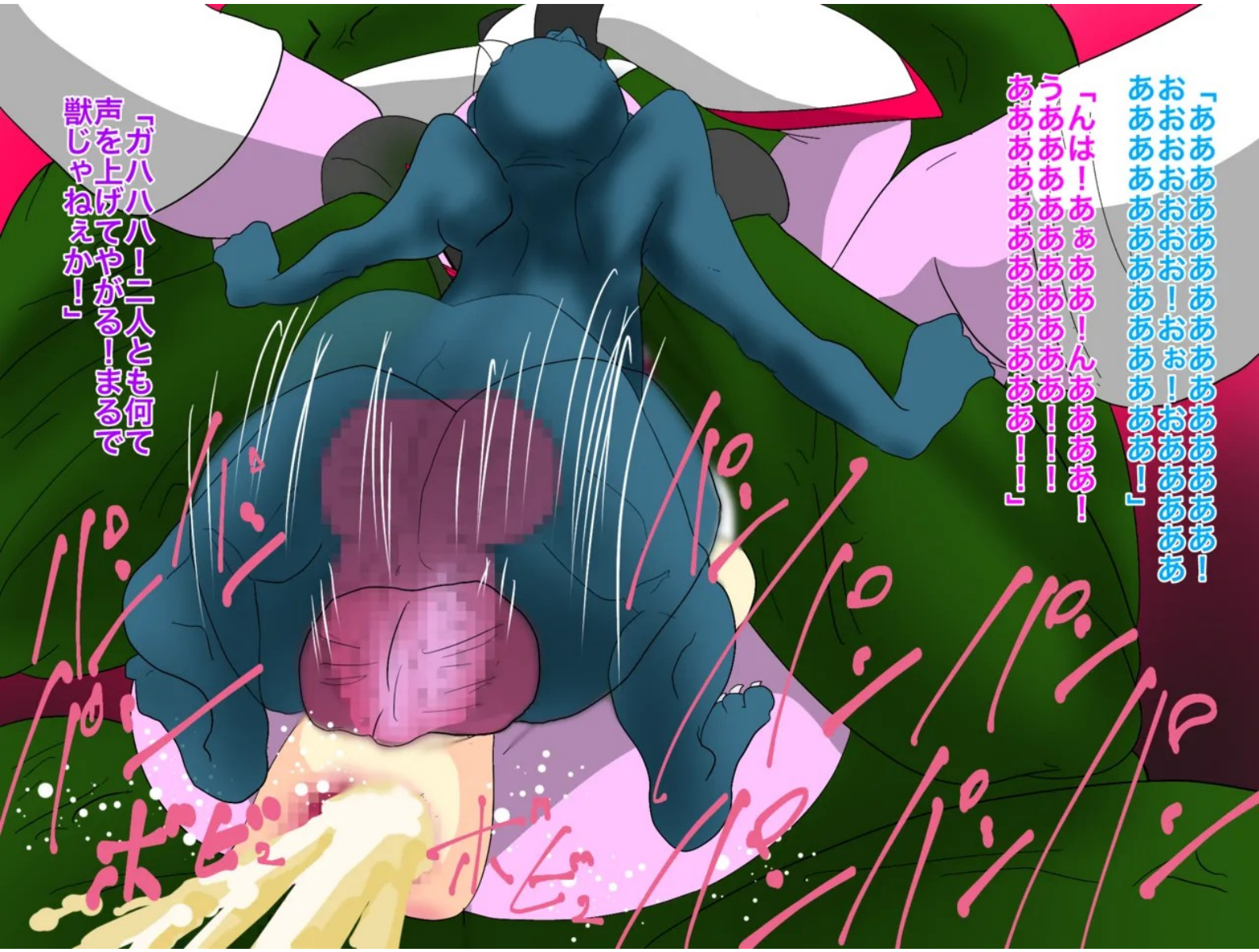


「おおおおおおおおおお  
あああああああああああ  
」  
「んはあああああああああ  
あああああああああああ♡」

「ああああああああああああああああああああ！  
おおおおおおお！おお！おお！おおあああああ  
ああああああああああああああああ！」

「んは！あああ！んあああ！  
うああああああああああ！！！！  
ああああああああああああ！」

「ガハハハ！二人とも何て  
声を上げてやがる！まるで  
獣じゃねえか！」







「あ…はあ…もつと…もつとお…」

「ガハハハ！ すっかりただの  
ザーメンタンクになったのだ  
おめでどう！ 夢の性奴生活！  
のスタートだ！ ガイナピンク！」

ん

オオオオ

「おらガイナピンク！  
我々リツガーへの忠誠を  
宣言する！」

「はい♡私女鳥ヒナこと  
ガイナピンクは♡  
ガイナバードを除隊し♡  
性奴隷としてリツガーに♡  
永久の忠誠を誓います♡」

ズキズキ

「オラ！性奴隷の証だ！  
受け取れ！ガハハハハハハ！」

「んあああああー  
イグ♡いっぐううううう  
いっぐううううううう  
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ビュ  
ウウ♡

ビュビュ♡

フ  
フ  
フ

ウ  
ウ  
ウ



「ガイナピンクはリッガーの手に  
堕ちた！このまま全人類を奴隷に  
してやるぞ！覚悟しろ愚かな人類！  
ガハハハハハハ！」

「はい…人類も私も…  
リッガーのモノです…♡」



